



2019年8月15日放送

印象に残る症例②

母子関係を見直し、母親への漢方治療を機に 長年の子どもの不調が改善した症例

富士宮市立病院 小児科 榎並 彩子

患者さんと向き合う中で、つい目の前の問題にのみ、夢中になってしまうと、「そもそもなぜこの方は健康な状態では無くなってしまったのか。」という根本的な問題を、つい忘れてしまうことがあります。表面に出ている症状一つ一つをなくしていくことを治療の目標に設定してしまうと、いつまでも根源的な問題にアプローチできず、患者さんの健康は遠のいてしまいます。今回は、「何を」治療すべきか、根源的な問題を追求する大切さを痛感した症例です。

今回の主人公は、くりくりとした眼が印象的な、穏やかな男児です。

最初にお会いした時、彼は11歳で、受診のきっかけは、事故後のPTSDについてのご相談でした。5ヶ月前に交通事故にあって以来、救急車の音を聞いたり事故現場近くを通ったりすると、口の中にガラスの破片の感触や血の味が蘇る、当時の恐怖心がありありと蘇る、ということでした。また、事故後、暗闇を怖がるようになり夜眠れない、独り言が増えた、下痢が頻回になった、ということでした。

穏やかに優しい口調で自分の状態を上手に説明してくれて、最初からとても心開いて接してくれているのを感じました。

既往を確認すると、「幼稚園の時に発達障害と診断されて、今でも専門病院に通院している。情緒が不安定なところがある。」とのことでした。

外来でのご本人の様子、素直で、自己主張がそれほど強くなく、心開いて話してくれる様子。お母様に何度も確認をとりながら自分のことを話す様子、そして腹直筋が強く張っており、ほんの少しお腹を触っただけで強くくすぐったがる様子から、小建中湯を朝夕内服していただくことにしました。加えて、危険にさらされた時の緊張状態がそのまま持続しているような PTSD の状態に対して、柴胡加竜骨牡蛎湯を寝る前に内服していただくこととしました。

1週間後の外来フォローの際、本人に確認すると「内服してすぐに効果を感じた。内服していると全ての症状が出ないけど、内服を忘れると、全ての症状が戻るので、内服がまだ必要だと思う」と話してくれました。

その後、良い経過を辿り徐々に内服を減らすことができ、最終的には、彼自身が必要と感じるタイミングで、柴胡加竜骨牡蛎湯のみ服用する、という形になりました。

これをきっかけに、彼は漢方薬をととても気に入ってくれましたので、その後も、問題が起きた時には漢方薬で対応させていただきました。例えば嘔気が出て食欲が極端に下がった時に六君子湯を、寝つきが悪くなった時には抑肝散を使用し、いずれも速やかに効果を認めました。

月日が流れ、彼が14歳になった年の5月、嫌がっていた学校の宿泊学習がありました。この前後から不眠、頭痛、嘔気、腹痛がひどくなり、身体所見と本人の様子から、再び小建中湯+柴胡加竜骨牡蛎湯を処方しました。

しかし、宿泊学習が終わった後も、嘔気が持続し増悪していきました。そして6月には1日中嘔気が持続し1日に6~7回も嘔吐するようになってしまったのです。そこで、小建中湯と柴胡加竜骨牡蛎湯は中止して、以前、嘔気が出て極端に食欲低下した際によく効いた六君子湯のみ使用してもらうことにしました。内服開始後、速やかに症状が改善傾向となり、7月になる頃には、嘔吐はほぼなくなり食事も安定して取れるようになりました。

しかし、今度は「誰かに監視されている。影が見える。怖い。」と訴えるようになったのです。再び、何か危険にさらされているような緊張感が見られるようになりました。六君子湯はそのまま継続し、柴胡加竜骨牡蛎湯を再開しました。しかし今回は、なかなか改善しません。寝つきも悪くなり、ますます疲労していく彼を見ながら、なんとか癒す方法はないのかと甘麦大棗湯を試したり、半夏厚朴湯を試したり、色々しましたが、どれもうまくいきません。

そして9月、彼の学校の先生から電話がかかってきました。先生がおっしゃるには、

「学校には毎日来てくれるのですが、ずっと顔色が悪いんです。この間は“お母さんが家で僕にイライラしている。お母さんといつも喧嘩してしまう。家族皆優秀なのに、僕だけ優秀ではないんだ。僕はダメだ。”と落ち込んでいました。いつも自分を卑下することを話しています。長い期間、色々とお薬を内服しているみたいですが、元気になっているように見えません。大丈夫でしょうか？」ということでした。

ハッとしました。そうだ、私は、症状に応じて処方を変えているだけ、まさに「対症療法」しかしていない。今回も、嘔気嘔吐があるから、と、安易に六君子湯を使用してしまい、結果的に、嘔気嘔吐という形で現れていた、彼の「何らかの苦しみ」を、もっと奥、心へと押し込んでしまった。それで、幻覚や監視されている感覚が出てしまったのではないか。かえって病気を深めてしまった、と非常に反省しました。私は目の前のことしか見ていなかったのです。何を治療すべきか、より根源的な問題を考えることを忘れていたのです。

そこで、まずは本人が学校の先生に話していた、という、母親との関係について、再度見直すことにしました。

改めて外来で、母子2人である時の様子を観察し、改めて彼に「感じていること、考えていること」を話してもらいました。そして10月のある日、お母様だけの話をじっくり聞く機会を設けました。

お母様から伺った話です。「子どもが幼稚園の頃のことです。幼稚園の先生から毎日電話がくるようになりました。そして“おたくの子は集団行動ができない。先生の言うことが聞けない。何とかして欲しい。”と言われ続けました。自分が責められているように感じ、毎日電話のかかってくる夕方が近づくとも恐怖を感じるようになりました。あちこち病院を受診して、やっと“この子が幼稚園でうまくやっけないのは発達障害だからだ”と言ってくれる先生を見つけました。子どもが中学生になった今でも、夕方、電話があった時間が近づいてくると、胸がドキドキしてお腹が痛くなります。私は他人にはイライラしないけど、子どもに対して、ものすごくイライラしてしまいます。子どもがした些細なことに対しても、すぐにカッとになって暴言を吐いてしまいます。特に今年度に入ってから、自分を抑えられません。子どもが不調を訴えると、イライラがひどくなります。」ということでした。

普段外来にいらっしゃる時は、穏やかによく笑うお母様でしたから、びっくりしました。1時間ほどかけてお聞きしたお母様のお話からは、「社会に我が子を否定されているという思い、そしてこの子のせいで自分は苦しんでいるという思いから生じる怒り、それでも我が子は魅力的だと思うのにそれに誰も共感してくれないという思いから生じる悲しみ」を感じました。お母様に、定期的にお話を伺うことと柴胡桂枝湯を内服してみることを提案しました。

その後、お母様は劇的な変化を遂げました。怒りが湧き上がり暴言を吐くこともなくなり、子どもに対して笑顔でいられるようになりました。そして、とても嬉しかったことに、お母様の変化とともに、彼の幻覚や監視されている感覚は消失していき、11月には「調子が良い。監視されている感じは気にならない。元気に過ごしている。」とお話してくれるようになったのです。

その後も彼は、元気に過ごしています。幻覚や監視されている感覚は、今も全くありません。食欲や睡眠の問題も落ち着いています。風邪をひいた時やアレルギー症状が出た時に漢方薬を使用するくらいで、普段は何も内服をしていません。

お母様が、我が子の存在を心から肯定し喜べるようになったことにより、彼自身が、自分の存在を肯定でき、この世界に安心感を感じられるようになったのだと思います。

「何が問題の根源か。何を治療すべきなのか。」という視点の大切さを教えてくれた、心に残る症例でした。